

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 SINAVONG Phonevilay

論 文 題 目

**Roles of Culture in Rural Resettlements in Laos:  
A Case Study of Nongxong Village**  
ラオスの農村再定住における文化の役割：  
ノンゾン村を事例にして

論文審査担当者

主査	名古屋大学	教授	宇佐見晃一
委員	名古屋大学	教授	藤川清史
委員	名古屋大学	准教授	上田晶子

# 論文審査の結果の要旨

## 1. 論文の概要と構成

ラオスにおける農村再定住には、原因の違いによって2つの形態がある。その1つは、これまでの調査研究の主な対象となり、①サービスの提供、②ケシ栽培の撲滅、③治安の向上、④焼畑栽培の根絶、⑤文化的統合を達成目標とする政治色の濃い政策として進められてきた農村再定住である。もう1つは、本論文が焦点を当てる電源開発事業にともなう農村再定住である。

ラオス政府は1980年代に入り、経済発展を牽引する電源開発事業（その殆どが水力発電用のダム建設）の開発に取り組み、その開発にともなう農村再定住という政策課題に取り組んできている。周辺諸国での移住・定住政策と同様に、ラオス政府の定住政策も生計破壊、民族的衝突という問題を経験してきた。これらの問題の発生防止あるいは被害軽減という立場から、定住の鍵となる要因として、多民族国家であるラオスでは農村再定住政策（計画～実施）における「文化」の実践的取り組みが行われてきている。

本論文は、水力発電用ダムおよび発電所の建設によって複数の農村（民族）が移転し、1つの既存の農村に定住する事例（多民族の共住）に依拠して、①再定住の準備段階において考慮された文化要素とその基層にある価値観を明らかにする、②再定住者の生計再建の実態を明らかにする、③再定住における社会的適応（社会関係資本の再建）と文化の関係の特徴を明らかにする、という3つの具体的目的を設定して、文化が再定住を選択した人々の生計再建に果たす役割等を検証している。調査事例であるノンゾン村の多民族性は、2009年に2つの農山村（109世帯）が移転してくることによって更に深化した。農村再定住した3つの主要な民族から成る74世帯に対して2011年に実施した聞き取り調査に基づいて、5種類の資本 capital（社会関係 social、自然 natural、人的 human、物的 physical、金融 financial）の構成によって把握される生計の再建および文化の基層となる価値観（36項目）の実態を明らかにし、生計再建における民族間差異の検証には分散分析（主に、フィッシャーの正確検定 fisher's exact test）を、質的データとして収集できた生計再建と文化の関係性を定量的に解析するために回帰分析を採用している。

本論文は7つの章から構成されている。

第1章は問題意識、研究目的、章節構成を説明している。特に、ラオスにおける再定住に関するこれまでの研究が明らかにした再定住の負の側面を社会、生計、文化の視点から整理している。

第2章は①アジア地域およびラオスの農村再定住の経験、②提起されてきた農村再定住の改善策と新しい概念、③世界銀行、アジア開発銀行、ラオス政府の農村定住策、という段階を踏んで関係する文献を批判的に検討した後、ラオス農村の生計の特徴を整理する一方で、本論文の鍵となる語句である「社会関係資本 social capital」「文化」「貧窮・リスク・再建モデル impoverishment, risks, and reconstruction model」「開発を取り込んだ再定住 resettlement with development」の概念を整理している。

第3章は方法論の章であり、データの収集と分析に係る方法、調査研究対象のノンゾン村の基本的特徴を概説している。

## 論文審査の結果の要旨

第4章、第5章、第6章は本論文の核となる実証的研究の成果を論述する章である。第4章は、住民が取り込まれる再定住の過程（「計画・協議」と「移転」）における合意形成に向けた文化的配慮の有意性を明らかにし、これらの文化的配慮を構成する要素（象徴 *symbol*, 儀式 *ritual*, 信仰 *belief*, 偉人 *hero*）を3つの民族間で比較した結果、前者3つの要素において有意な差があることを明らかにした。さらに、対象にした36の価値観のうちの18の価値観について、3つの民族間に有意な差があることを明らかにした。第5章は、農村再定住の成否と特徴について、生計を捉えるための5種類の資本 *capital* を説明する24指標を使って生計再建の実態を計測し、3つの民族間で比較検討した結果、社会関係、物的、自然という3つの資本における適応（再建）に有意な差があることを明らかにした。とくに、社会的適応（社会関係資本の再建）が困難であることは3つの民族に共通していた。第6章は、第4章と第5章の成果を受けての章であり、生計の再建を社会関係資本の再建に限定した上で、生計の再建を規定する価値観（文化の基層にある要素：9分類36指標）を定量的に分析した結果、一見、文化は社会関係資本の再生を抑えるように働いているが、その属性の内側を見ると、「抑制的に機能する博識 *universalism* と治安 *security* ⇔ 促進的に働く博愛 *benevolence* と相似 *conformity*」という対称性が明らかにされた。

第7章は実証的分析の結果に基づく結論、政策的提言、今後の研究課題から構成されている。

本論文の第4章は学術誌 *Asian Culture and History* に、第5章は学術誌 *Journal of Agricultural Extension and Rural Development* に掲載されている。

### 2. 本論文の評価

本論文は、以下の点において、既存の知見の補完的検証、開発と文化、農村再定住（移転）政策における知見の発掘という学術的貢献として評価できる。

- ① 従来の定性的アプローチの上に定量的アプローチを積み上げるという分析的工夫を行い、生計の再建という視点から農村再定住（移転）の影響の実態を総合的かつ定量的に明らかにしている。あわせて、民族間の文化的差異を定量的に説明した。
- ② 既存の政策実施ガイドラインに用いられる貧窮・リスク・再建モデル *impoverishment, risks, and reconstruction model* が提示する8つのリスクの視点から、文化的リスクを具体的に明らかにした。
- ③ ラオスの農村再定住政策の実施における文化的配慮と文化の効力とその限界は、多民族の共住という現在の政策前提を見直すための示唆に富む。

以上のように、設定した研究目的を達成し、博士論文として評価できるが、以下のような問題点を含んでいる。

## 論文審査の結果の要旨

- ① 「文化が重要である」と強調されているが、(1) 文化そのものに重要性を見出しているのか、(2) 文化が移転後の適応と生活基盤の確立のために必要なのか、の区別が明確化されていない。
- ② 社会的適応（社会関係資本の再建）における文化の重要性を検証する推計式の決定係数が低いにもかかわらず、この推計式によって説明できない変数（要因）を取り込んだ議論が足りない。あわせて、それぞれの価値観の性格からして不加算であると考えられるけれど、計測された価値観を同じウエイトで合計して文化を数値化することには注意深い議論が必要である。
- ③ 社会的適応（社会関係資本の再建）は3つの民族間で有意に異なるという興味深い結果がありながら、この適応（再建）と文化の関係における3つの民族間の差異という視点での分析が不十分である。

これらは、本論文の研究をさらに発展させるための課題であり、本論文の博士論文としての価値を損なうものではないと判断された。

### 3. 評価の結果と判定

以上の評価に基づき、審査委員一同、本論文を博士（国際開発学）の学位を授与するに値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。